

た。活動初期から二〇〇九年までブラジルの教団から六名の牧師が経済的支援を受けて順次派遣されていることから、海外宣教型ブラジル系教会の特徴も持っているといえる。しかし、日本の教会活動でも非日系人信者が少ないことが特徴で、ブラジルで構築されていた信者ネットワークが彼らの日本での活動基盤を成していることがわかる。二〇一一年現在、八か所の教会と伝道所を開き、信者数は百五十人程度。そのうち約半数が日本で入信している。活動のピークは一九九八年頃であり、現在は停滞しつつあるとみられる。

筆者の調査（二〇一一年三月）では、リベルダーデ教会では信者七三名のうち大卒・大学院卒が五七名と学歴が極めて高いという特徴がある。そのうちデカセギ経験者は九名で、以前からの信者としてネットワークを維持しつつ帰国後も教会活動に順応している。一方、日本で入信した信者は、帰国後のネットワークの構築に困難を感じている場合が多い。日本ではデカセギの間で階層意識が平準化され、個々のバックグラウンドは問われずに「家族（同族）意識」が高まるが、帰国後、高学歴・専門職の多い信者層を前にして階層差を感じ、元信者が教会活動から離れる場合が見られる。

本研究は、二〇一〇年度 天理大学 学術・研究・教育活動助成（研究課題名「宗教実践の構成と組織化…在日ブラジル人と帰国ブラジル人の事例」）による研究成果の一部である。

ハーレムの黒人教会を考える

芦 名 裕 子

ニューヨークのユニオン神学校はハーレムに隣接しており、芦名裕子は一九八七年の訪問以来、パウル・テイリツヒ（一八八六―一九六五）がハーレムの黒人教会をどう考えていたか疑問に思っていたが、二〇一一年の再訪の際、実際にハーレムの黒人教会を巡り、テイリツヒやボンヘッファーの黒人教会との関わりを考える。再訪までの二十年で、ニューヨークは安全な街となり、映画の影響でゴスペルが世界的に認知された。

ハーレムの教会は、公的な場所で正装して行く。男性はタキシード、女性は派手な帽子に豪華なスーツで礼拝に出席する。早くから正装での礼拝出席を説かれていた牧師の植村正久氏（二八五八―一九二五）について述べ、次に、黒人と結婚したラファディオ・ハーン（一八五〇―一九〇四）の状況を論じる。

テイリツヒは、ニューヨーク亡命の一九三三年に、ドイツ語新聞社主の案内する旅行グループと一緒にハーレムへ行ったという記録だけで、黒人教会との関係は不明である。彼は、一九三三年から一九五五年まで、ユニオン神学校の教員だったが、客員講師からの出発で、安泰したものではなく、英語から学ばねばならなかった。ハーンが黒人との結婚で職も失ったように、安易な黒人教会への発言は職を脅かすものだったかもしれない。

現在では、黒人学生が多いユニオン神学校だが、テイリ

ッビの時代はどうであったのかを、義父で牧師の芦名直道(一九五〇―一九五二 ユニオン神学校留学)のユニオン神学校の写真付き名簿で確認したところ、ユニオン神学校の同級生には黒人が数人在籍していた。テイリツビが黒人の学生達と交流があったことは事実である。

一方、一九三〇年から九ヶ月間、「アメリカの教会・神学事情を研究する」ためにユニオン神学校に留学したディートリッヒ・ボンヘッファー(一九〇六―一九四五)は特筆すべきである。彼は、ハーレムのアフリカン・メソジスト・エピスコパル教会の共同体から影響を受け、ハーレム最古の教会でゴスペルで有名なアビシニアン・バプティスト教会に、ユニオン神学校の黒人の友人の案内で、約六ヶ月間、ほとんど毎日曜日の午後三時半に教会に通い、教会学校にも奉仕した。日曜学校と教会クラブの正規の協力者になった。彼が黒人教会への奉仕に心底から喜びを見出し、「アメリカの滞在の間、私はできるだけ時間を費やして、黒人問題をあらゆる面から知ることと、この隠された角度から白人のアメリカを観察することに努めた」と言い、ゴスペルもお得意の歌となった。ワシントンの黒人総合大学ハワード・カレッジにも行く。このハーレムでの経験が、福音の社会的側面に対する彼の眼を開かせ、神学者から同時代人として生きる契機となったと言われている。

ボンヘッファーは「このような黒人たちとの個人的な接触は、私のアメリカ滞在の間で最も決定的で喜びに満ちた出来事の一つであった。私はここでごく簡単に黒人教会の特性について語ることができるが、何よりも先ず、私は黒人教会におい

て、福音が語られるのを聞くことができたのである。そこで本当に福音について語られる時、それにあずかるうとする空気は最高潮に達する。そこでは、罪と恵み、神への愛と終わりの望みとが、われわれが今までに馴れていたとは違った形ではあるけれども、本当にキリスト教的に語られ、きかれることができた」と言う。

テイリツビとボンヘッファーをつなぐ人物はラインホルト・ニーバーで、時期は違うが、二人をユニオン神学校に招聘した。ハーレムの黒人教会に積極的に参与したボンヘッファーは、一九三九年亡命のためユニオン神学校を再訪するが、すぐにドイツに帰国し、ヒットラーの暗殺に加担したため、処刑される。

マハトマ・ガンディーにおける 宗教的多元主義と世俗主義

外川 昌彦

インド独立の父マハトマ・ガンディーは、一九二〇年代初のヒラーファト運動において、宗教間の対話に期待し他宗教との相互理解と寛容性を訴えていたが、一九三〇年の塩の行進では、むしろ個別の「宗教」には依拠せず、しかし極めて宗教的な装いを伴ったナショナリズム運動を組織した。本報告では、このようなガンディーの宗教と政治をめぐる認識の変化の背景に、一九二〇年代を通して顕著となる各地での宗派暴動の